



光受寺通信

R.4年2月1日 発行
発行元 光受寺
https://koujyuji.com/

令和4年は寒い年明けとなりました。コロナの感染状況は年末には、ほぼ終息を迎えたかと思われましたが、再び変異したオミクロン株が急速に蔓延し始めました。終わりの見えない状況に閉塞感はますます増大するばかりです。

常識では理解できない凶悪な犯罪もここ1~2年頻繁に起こっているようで、今までの社会の目には見えなかったはずみが一気に噴出しているようにも思えてくるのです。確かに世の中は便利すぎるほど便利になりましたが、格差社会は広がり、人的交流も極端に少なくなり、孤立感が増すばかりのようです。私たちの将来は果たして本当にこれでよいのでしょうか、コロナ感染が私たち一人ひとりにとっての「本当の幸せ」とはと、深く考えさせられる機縁となっているように思えるのです。

年明け早々にあるご門徒が亡くなられました。本業の仕事も、社会への貢献にも多大であり、大変尊敬申し上げておりましたが、70歳頃にご寄稿いただいた新聞原稿には悔いの多い人生だったと述べられていました。さぞかし充実した人生だったと思っていましたのに、信じられない言葉でした。その後は不自由なお体ではありましたが、本山奉仕団としてもご参加いただき、約15年間、「お念仏」に生きられた方でした。今も、いつも一緒に唱和した正信偈の聲が響いてくるのです。「早く目を覚ませよ」とも。

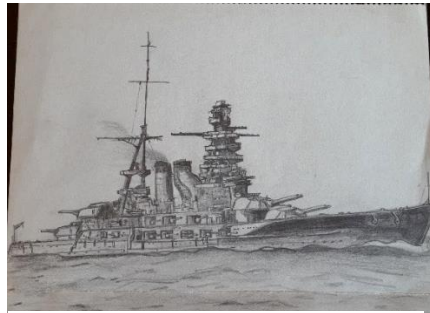
趣味を楽しむ — 鉛筆画の世界 — T・Gさん

後藤 毅さん、62歳。大手電力会社を退職後、電気の資格を活かしたお仕事に従事されている。子供の頃から絵やプラモデルを作製することが好きで、中学、高校は美術部に所属していたとのこと。今でも時々美術館などにも足を運び、自分の好きな作者の本物の作品に出会うことに喜びを感じているという。



玄関に飾られた
キースヘリングの模写

現在は自分の時間がいっぱいあるので鉛筆画に取り組んでいるとのこと。「油絵も描いてみたいが、お金がかかるので」と、少し冗談ばくお話しされていたが、鉛筆画による細密な描写がお好きなのではと拝察申し上げている。毎月、月命日にお伺いするのですが、玄関には毅さんの作品が時々入れ替わって展示されている。模写された作品も本物と見間違えるほどでその都度、感動している。



小学生で描いたという日本海軍の戦艦「長門」。画面いっぱいに描かれた軍艦が雄々しく描かれ、波の描写がとてみリアルです。



現在制作中という
関ヶ原古戦場記念館。とても細密に描かれています。(色鉛筆画)



その他、日本の名車、スカイラインや、スヌーピー、ブルースリーの模写など多くの作品が目を楽しませてくれます。



本海軍の象徴としての風格をも感じさせてくれる。終戦後はアメリカの核実験の標的艦として、沈没するということ悲しい運命にもあったという。

ご連絡

○春季永代経 二月二十一日(月)祝日(コロナの感染状況により変更があります)

○定例学習会(2月)中止。 ○金曜喫茶 当分休止。

(3月以降につきましましては、3月の光受寺通信にてお知らせいたします)

今月の掲示板

春を楽しみましょう♪

長引くコロナ感染拡大が心配され、気持ちも塞ぎがちになります。

せめて早春の自然に触れ、心に潤いを。

本年も梅の花がご門徒の皆様の「ご来寺を待ちたい」としてあります。



昨年に引き続き感染対策には十分に配慮しておりますが、混雑する場合もございますので、混雑時はできるだけお避け下さるようお願いいたします。なおマスク等基本的な自己管理対策もお願いいたします。特にトイレなどのご利用は不特定多数の方が利用されますので、できるだけお控えいただき、ご利用の際は手洗いの徹底をよろしくお願いいたします。

「こんな花も楽しめます。」



クリスマスローズ



椿 数種



山茶花



同時開催

秀瑤書院書画展 二月二十三日(水・祝日)

つりびな展示

三月六日(日)



「つりびな」いき粋墨保創成プロジェクト

主催による「つりびな小町」巡りが町内で行われています。

死ぬことが

情けないのではない

空しく終わる人生が

やりきれないのだ

「日めくり法語」

「一語一隅」より 東本願寺発行

人間は誰しも平等に「死」を迎える。これほど確かなことはないでしょう。
しかし私たちは心の片隅には老病死の抱えながらもその日その日を空しく過してはいないでしょうか。「空しく終わる人生」とは真のよりどころを見いだせなままに一生を終えていくことです。

自分の都合の悪いことも、良いことも人生におけるすべての出来事がこの私のいのちの尊い事実であったとうなずいていける人生。それが南無阿弥陀仏の世界を生きることでないでしょうか。



光受寺御遠忌法要



こころの散歩

11回目



新「一冊」

十一回連載

樹林

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗協賛テーマ
南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていく

— 問い続ける歩みをともし —

浄土三部経の観経を想う

以前から観無量寿経は特異なお経と感じており、今もその思いは変わりません。端的に申せば自力的性格の強いお経という印象です。

経文によるとイダイケへ韋提希に、「極楽浄土を觀ぜしめんことを教えんと」して十六の觀想が説かれます。このうち十三觀までは「定善觀」と言われ、正坐して姿勢を正し、極楽浄土の姿を思い描くものです。後の三觀は「散善觀」と言い、生活の中で行う觀想を言います。そこで他力の教えに慣れ親しんでいる側からみると「觀想」そのものがどうも自力の取り組みに見えてくるのです。

善導大師は「觀経疏」を著し、従来の觀経の解釈を大きく改められたわけですが、残念ながらその内容は、よく分からないままです。昭和法要式の經典を見ても、ウエイトは散善觀にあるようで、特に下品下生の觀想で次の一節があります。「十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆえに念念のなかにおいて八十億劫の罪を除く。臨終の時、金蓮華を見る」とあり、本命は下品下生であることがうかがわれます。